

〈原著論文〉

バレエ鑑賞プログラムの効果と観客の鑑賞能力に関する研究： スポーツ鑑賞行動構造化の試み

醍 醐 笑 部¹⁾・木 村 和 彦²⁾・作 野 誠 一³⁾

The effects of ballet appreciation programs on the appreciation ability of audiences :
An attempt to structure sports appreciation behavior

Ebe DAIGO¹ Kazuhiko KIMURA² Seiichi SAKUNO³

Abstract

There are few studies on spectator sports that analyze people's conversations or expressions from watching games. The aim of this study was to measure sports appreciation ability and to investigate the different types of programs that support spectators (henceforth, "participants" in the context of programs). The types of programs that were assumed to exist are "the one-sided explanation-type program," "the communication-type program," and "the workshop-type program." In this study, the workshop-type (WS) and the communication-type (COM) programs were investigated in the context of university ballet classes. These programs were different in regard to the degree of verbal expression of sports appreciation that participants shared during each program.

As a result, about half of the participants in both groups had had a previous ballet experience. On the other hand, over 10% of the participants replied that they were still taking ballet lessons. More than 30% of the participants had never taken ballet classes.

Sports appreciation ability was measured in two ways: by having the participants evaluate it themselves, and by having others evaluate it. In the analysis of own evaluation, it became clear that three sports appreciation abilities (the ability to formalize, the ability to be objective, and the ability to concentrate on information), which seem important for expression, were higher in the COM program participants than the corresponding abilities in the WS program participants.

The program involving a low degree of expression (the WS program) elicited lower expressions than the program involving a high degree of expression (the COM program). It was suggested that expressions are related to sports appreciation ability.

This investigation did not clearly reveal whether the WS program increased sports appreciation ability. However, the participants in the WS program had a significantly higher degree of satisfaction with the program.

キーワード：スポーツ鑑賞行動 スポーツ鑑賞能力 鑑賞プログラム バレエ

Keyword : Sport appreciation behavior , Sport appreciation ability, Educational application program, Ballet

1, 2, 3) 早稲田大学スポーツ科学学術院
〒202-0021
東京都西東京市東伏見 2-7-5

1, 2, 3) Faculty of Sport Sciences, Waseda University
2-7-5 Higashifushimi Nishitokyo-shi Tokyo Japan
202-0021

I. はじめに

1. スポーツの見方における多様化と質的变化

近年、人々をひきつけるスポーツの種類も、またひきつけられる観客の層も多様化している。観客はスポーツ観戦空間を構成する重要な要素であり、熱狂的な雰囲気を作り出すための集客はスポーツ経営学上の重要な課題のひとつとなっている。スポーツ経営体^{注1)}は、観客のニーズを満たすべく観戦空間を作り上げ、様々な中核的・周辺の価値を生み出し提供する。しかし、それらの諸価値は多様で複雑な状況に依存しており、完全にコントロールすることはできない。スポーツ経営体が目指す魅力的な観戦空間を実現させるには、自らの経営努力によって少しでも確実性のあるスポーツサービスにするという方法だけでなく、サービスの受け手である観客のスポーツの見方を変え、複雑性や不確実性のある状況においても、よりよいスポーツ観戦空間を作り上げるという方法が考えられる。中村(1995)はスポーツの見方に「楽しさ」を認める一方で、「人々が何を見たいと考えるかによってスポーツが発展したり頹廃への道を歩んだりすることがある」(p.58)と述べ、スポーツ文化の発展を見据えた観客の見方に早くから着目している。

また、(公財)日本体育協会は2013年に「21世紀の国民スポーツ推進方策—スポーツ推進2013—」を公表し、今後10年間の国民スポーツ推進の具体的な方策を示した。2008年に示された「21世紀の国民スポーツ振興方策」にはみられず、「21世紀の国民スポーツ推進方策」に新たに登場するキーワードが、「分析・評論」である。この推進方策では、スポーツを「する・みる・支える」楽しさに加えて「書く・描く・写す」など表現する芸術的な楽しさや「分析・評論」する知的な楽しさを体験し共有することのできる機会の提供を、新たな事業を生み出すために必要な視点であると述べており、観客のスポーツの見方の変化に着目している。

2. スポーツをみる能力

スポーツをみてただ楽しむだけでなく、上記に述べたような多様な参与形態、質的な深化を伴う観戦経験を実現させるためには、観客のスポーツをみる能力が関わってくる。齊藤ら(2004)は、スポーツ観戦経験についてJ.ラスキンの価値論を基に有効価値論に依拠しスポーツをみる目を肥やすことの重要性を述べ、みるスポーツを振興する上でも、さらには豊かなスポーツ生活を実現させる上でもスポーツ観戦能力の開発は基礎的な条件であると述べている。齊藤らは、これまでの自身の研究をもとに観戦能力とは、スポーツのゲーム現象を意味・解釈する力であり、そのゲームの構成要素別の理解力を総合させた力、「スポーツのゲーム現象を理解する総合的な力」と定義し、中核的便益構造としてのルール理解力、技術理解力、戦術理解力をサブ観戦能力と定義している(齊藤ら、2004)。

醍醐ら(2014, 2016)は齊藤らの研究をバリエ鑑賞へと応用させ、作品の中核・周辺構造を明らかにしたのち、みる目の肥えた舞踊評論家に備わる15の鑑賞能力を明らかにしている。醍醐らの研究では、これまでのゲーム現象を目の前にした観客の態度や行動だけでなく、事前の情報収集や、その後の会話・表出化に求められる能力を具体的に抽出している点で「分析・評論」といった今日的なスポーツの観客に必要な能力により焦点化しているように思われる。

スポーツをみることは、一般に「スポーツ観戦」と呼ばれ、そして「スポーツ観戦」はゲーム現象を目の前にした熱狂的な観戦空間を想起させる。そもそも娯楽と呼ばれるスポーツ観戦に教育的価値や観戦能力といった特殊な能力を求め、気晴らしや息抜き以上の効果(便益)を期待する必要があるのかという批判的見解(松岡, 2015)も存在している。本研究では、こうした松岡の批判に自覚的になるとともに、前述した「分析・評論」を伴うスポーツの見方や、選手・チームの背景や物語性に惹かれて観戦空間の外においても積極的に情報収集をするスポーツの見方を想定し、「スポーツ鑑賞」とい

う名辞を用いることでスポーツの観客行動における新たな研究視座を提供しようと試みるものである。

3. スポーツ鑑賞研究の潮流と本研究における位置づけ

研究の文脈においてスポーツ鑑賞という概念が最初に提起されたのは、学習指導要領のなかで他者の運動をみることに「鑑賞」を用いたと言及した草深（1983）に遡る。また、「スポーツ鑑賞」という言葉は、早川（1994）、海老原（2004）による文献の中でこれまで幾度か提唱されている。しかし、「スポーツ観戦」という言葉に比べて社会的に普及しているとは言えず、スポーツ科学領域において広く認知されているとは言い難い。早川や海老原に続き、醍醐（2015）も、スポーツ観戦の持つ背景や魅力を受け取る形態として「スポーツ鑑賞」という用語を使用した。そこでは「スポーツ観戦の『みる』行為そのものを指すのではなく、『みる』と同時にそこに存在する背景や物語性も含め『楽しむ』行為、『スポーツをみることによって、その戦いの様子だけでなく、魅力を味わい、理解する』行為である」と定義している。

今日では、携帯端末等の普及によって結果（勝敗）を即時的に知ることができる。中村

（1995）は以前より、我が国のスポーツ報道が競技の予想や結果に偏っていること、しかしスポーツ愛好家の中にはスポーツに関する知識を深めたいと思って観戦する人が存在していることを根拠として、スポーツをみることに對する「貧困な鑑賞能力」について言及している。勝利中心主義の楽しみ方では楽しさの質が小さくならざるを得ず、「技術や競技の展開を分析的に、あるいは総合的に考察できない」のであり、楽しさが感情や感覚に支配されているうちは貧困な鑑賞能力にとどまると指摘している。さらに、中村（1998）は「スポーツを見る本当の楽しさはこのような（見る目をもって推定・評価する）ところにあるということができ、それは誰にでもできることではない」（p.223）と述べたうえで「スポーツの試合を見るというのは単に勝敗の行方を知ることやプレイのあれこれを楽しむことだけではない」（p.219）と観客の勝敗にこだわりすぎる態度を批判的に論じている。つまり、「スポーツ鑑賞」行動は「スポーツ観戦」と別物ではなく、勝敗に代表される結果と同様に試合に関わるこれまでの過程や背景といった知識を理解し、自らの経験との比較や共感によって味わい楽しみ、他者と共有することを重要視する観客の見方であると位置づけることとする。

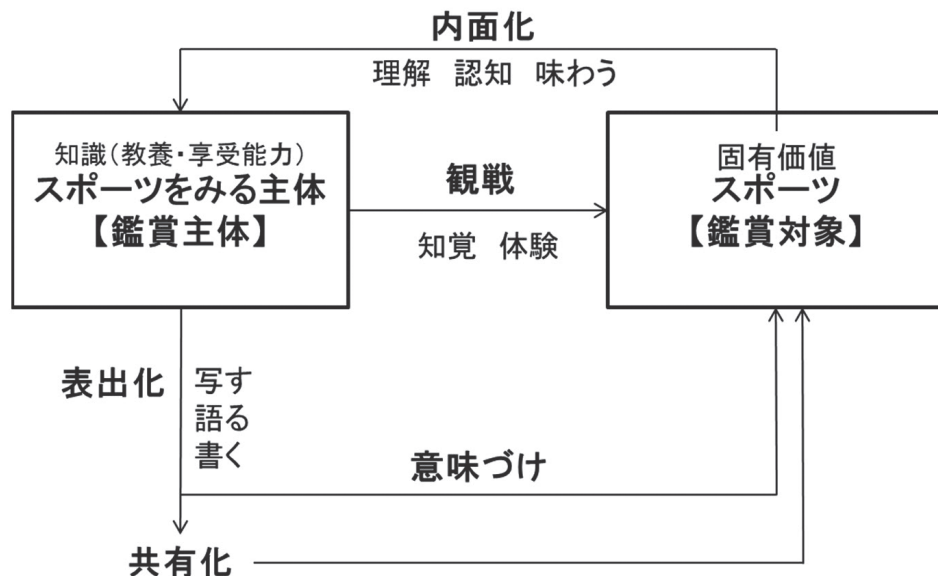


図1 スポーツ鑑賞の行動モデル

II. 先行研究の検討と研究目的

「スポーツをみること」は、これまで様々な視角から捉えられてきた。スポーツ文化論からの視角、スポーツに対してみるという行為をなす身体の視角、みる人の前で繰り広げられるスポーツと運動実践者、そしてみる人とその行為によって構成される空間論からの視角など広範かつ多様に論じられてきた。昨今活発に展開されており研究蓄積が著しいスポーツ観戦者研究は、生産性という点においてみるスポーツに関する研究の中核を成している。しかし佐藤・片山（2007）による研究レビューでは、これまでのスポーツ観戦者研究がスポーツ観戦のエンタテインメント的性格を強く反映し、観戦者の多様性を包含して説明できていないことを指摘している。観戦者の能力や心理、認知を研究の対象とすることは、「具体的に何を観て、どのような価値が生じたのか」（齊藤，2013, p118）という問題にアプローチする領域である。これまでの観戦者研究の多くは、人間モデル（行動仮説）として「消費者」を認識の基盤としており、「最終的に代金を払って快楽を得るために商品を購入させるための行動モデル」（齊藤，2013, p118）を提供している。それに対して、齊藤（1991）は、観戦行動における「文化的価値の享受の仕方の違い」に着目し、従来の消費者モデルから生活者モデルへの拡張を企図している。この生活者モデルは本研究の観客像、つまりスポーツをみる人がその人の生活や地域、文化と結びつくような観戦者の捉え方、と近似であるが、これまでの観戦者研究において多くの研究蓄積がなされているわけではない。

中村（1995）は、スポーツをみることについて「批判的考察能力を向上させることが結果的にスポーツをしたり見たりする目的や目標をはっきり自覚させることとなり、スポーツ享受の主体者に育て上げていくことになる」（p.62）と観客のスポーツをみる能力について重要視しており、観客の考察能力とスポーツ文化の発展に言及している。中村が一般の観客の能力を研究対象としたように、本研究においても評論家

やアナリストなど特別な立場の人でなく、様々な学部の大学生を対象としている。本研究の目的は、大学保健体育授業の中で複数のバレエ鑑賞プログラムを実施し、①プログラムの内容とその特徴、効果を明らかにすること、②バレエ鑑賞によって得られた知見をスポーツへと応用しスポーツ鑑賞行動の構造化を試みることである。そのうえでバレエ鑑賞プログラムによって得られた結果について、スポーツ鑑賞能力育成に向けたプログラム開発を見据えた考察を行う。

本研究は、「スポーツ鑑賞」の理論的構築とその能力育成に向けたプログラム開発を目指す一連の研究の初期段階であり、鑑賞能力および能力育成に向けた鑑賞プログラム研究が盛んである芸術鑑賞研究から多くの着想を得ることとなった。中でもバレエを題材とした理由については次章の「研究対象の選定」において詳述する。

III. 方法

1. 研究対象

（1）研究対象の選定

ここでは、バレエ鑑賞プログラムからスポーツ鑑賞行動モデルの構築化を試みることを目的のひとつとしている本研究が、みる対象としてのスポーツについてどのような概念として定立するかという検討に先立ち、研究対象としたバレエとスポーツの関係性、有用性と限界について述べる。スポーツと芸術、その重なりに位置するダンスや身体芸術、芸術系スポーツの親近性については、これまでもホイジンガの遊びの本質的なふたつの層である「闘争」と「表現」の結びつきに言及した井上ら（1999）をはじめ、スポーツ美学において樋口（1987）も指摘しているところである。しかし、本研究ではスポーツをみることをスポーツの質や運動性によって分類するのではなく、観客の意識や経験、評価に軸足を置いて分析し整理する視点が必要であろう。

スポーツや、バレエを含むダンスにおける運動動作をどちらもパフォーマンスと呼ぶことは、もはや一般的である。ゴフマンによる「特定の観察者の目の前にとどまっている間におこる個人の活動や行動で、観察者に何らかの影響を及ぼすことすべて」というパフォーマンスの定義（高橋，2001）をみると、観察者（鑑賞者、観客、オーディエンス、ギャラリー）の視点においてもスポーツとダンス（バレエ）には、部分的重複が存在していると推察することができる。鑑賞プログラムを実施するバレエを含むダンスは採点競技や表現運動と呼ばれる種目との共通点を多く保持している。採点競技とは「フィギュアスケート・体操競技・水泳の飛込競技などのように、演技を点数化して競う競技」（大辞林[第三版]）とされており、みる側（採点・評価）の視点によって定義されているスポーツでもある。採点競技ではエキシビションのような勝敗を問わない形態を意図的に作り出すことが可能であり、一方のダンスにはコンクールといった勝敗の要素を取り込むことが可能であることから、両者には多くの共通点があると言えよう。しかし、採点競技やダンスは、観客による評価への関与の自由度が高い分野であり、観客自身の評価が公の評価（結果）に完全に合致しないこともある。

つまり、「バレエ」と「スポーツ」は基本的に異なる概念であるが、両者には無数の重なりが存在しており、本研究の知見はその重なりにおいて有用な知見であるといえよう。スポーツと多くの共通点を有していながら、基本的には勝敗のないバレエを本研究の対象とすることは、勝敗に強く影響されることのないスポーツ鑑賞行動とそのとき用いられるスポーツ鑑賞能力について提案できると考える。見方を変えれば勝敗に代表されるようにスポーツとしての特徴を欠いている状態であり「バレエ的側面に関するスポーツ鑑賞行動」と限定されるものである。

（2）研究対象者の選定

本研究では大学保健体育を受講する学生を研究対象とすることとした。現状では生活として

のスポーツと学校教育としての体育を明確に切り離すことのできない日本において、体育という長年親しんできたスポーツとの関わり方の範疇でありながら、主体的、かつ自発的なスポーツの機会となる大学体育授業は生涯スポーツに直結する重要な機会である^{注2)}。

体育における諸外国の社会学習論をまとめた友添（2009）は、1980年以降の日本において従来の「スポーツ技能の習熟を至上とする考え方」に変えて、学習者が社会の中でどのような問題意識を持ち運動やスポーツに習熟すべきかという学習が重視された」と述べており、生涯スポーツを見据えた体育授業のあり方として、大学生の参与形態の多様化や求められる能力の明確化、複数の授業内容（プログラム）の比較は重要な検討事項と位置付けることができる。

また、平成2（1990）年の中央教育審議会答申など、以前より多くの教育関連機関から人間が生涯を通じた主体的な成長・発達を目指す学習すなわち生涯学習の重要性が唱えられており、スポーツにおいても社会の中に知的な学びの機会が存在することは重要である。池上（2003）は、量産型の消費ではなく、情報収集から取捨選択、評価までの一連の行為を伴ってこそ文化の消費であると述べ、この行為を支援することで消費者は学習し、消費活動の「質の向上」につながっていくことを指摘している。大学生のスポーツ鑑賞能力や学習の機会を議論することは、彼らが「スポーツ文化を担う構成員」となるために、体育における価値観の変容、スポーツを核とした生涯学習、スポーツをみる文化の消費者教育の主に3つの視点から選定されたものである。

2. 研究枠組

（1）鑑賞プログラムの位置づけ

本研究は総合大学であるA大学の全学部生が履修可能である「保健体育科目バレエクラス（基礎・応用）」を対象とした。鑑賞プログラムを組み立てる際、実施者（筆者と担当教員）は美術分野から多くのヒントを得ており、以下にその経緯を記載する。

これまで美術教育の分野では、集団で行う美術鑑賞学習における参加者（観客）の変化、つまり学習の効果とともに、教育活動を企画し指導する側の配慮行動や働きかけ、支援が重要な関心事であったため、鑑賞授業、鑑賞教室などと呼ばれる鑑賞プログラムを題材とした研究が数多く存在している^{注3)}。

本研究は、美術における鑑賞教育において生徒とのインタラクションを模索し「対話型」と「知識享受型」を実施した熊野ら（2005）、そして鑑賞教育を行う指導者の働きかけのタイプを「一方的解説型鑑賞指導」「発問活用型」「対話的ギャラリートーク」「自由型鑑賞指導」「表現・制作との組み合わせ型鑑賞指導」の5つに類型化した吉田（2011）を参考に、鑑賞プログラムのタイプとして「解説型」「コミュニケーション型」「ワークショップ型」を想定した。このうち「ワークショップ型（以下、WS型）」と「コミュニケーション型（以下、COM型）」授業を実施し分析の対象とした^{注4)}。COM型が依拠した対話型や発問活用型はニューヨーク近代美術館のエducーターを務めたアレナスが開発して「対話型の鑑賞」をベースに考えられ

ており、近年では美術分野の主流な鑑賞プログラムの形態であるとともに事例報告は今もなお増え続けている（懸・岡田，2010）。その一方で、鑑賞によって作品をより深く理解し、楽しむためにもWS型のような体験の機会こそが有意義であると説いた論考も多い（林，2003；岡田2010）。バレエにおいても、WS型とCOM型を柱に、鑑賞者の解釈の進化や精密化を促す方法論を開拓していく必要があると考え本研究においてこれら二つの鑑賞プログラムを実施することとした。

(2) 調査枠組

具体的な調査項目は後述するが、本研究では総合的な授業評価、内容理解や鑑賞能力（他者評価・自己評価）について、鑑賞プログラムの違い（WS型とCOM型）による比較を行いそれぞれの特徴を明らかにした（図2）。調査では鑑賞プログラム実施前とプログラム実施後に計3種類の調査票を用意し回答を求めた。なお調査対象には調査内容は統計的に処理し個人が特定される形での結果の公開はなされないことを説明し、同意を得たうえで調査を実施した。

表1 本研究における鑑賞プログラムの位置づけ

	熊野ら（2005）	吉田（2011）	醍醐ら（2015）	本研究
鑑賞授業の類型化	知識享受型	一方的解説型鑑賞指導	（解説型）鑑賞授業	—
	対話型	発問活用型 対話的ギャラリートーク 自由型鑑賞指導	—	コミュニケーション型鑑賞授業（COM型）
	—	表現・制作との組み合わせ型鑑賞指導	—	ワークショップ型鑑賞授業（WS型）

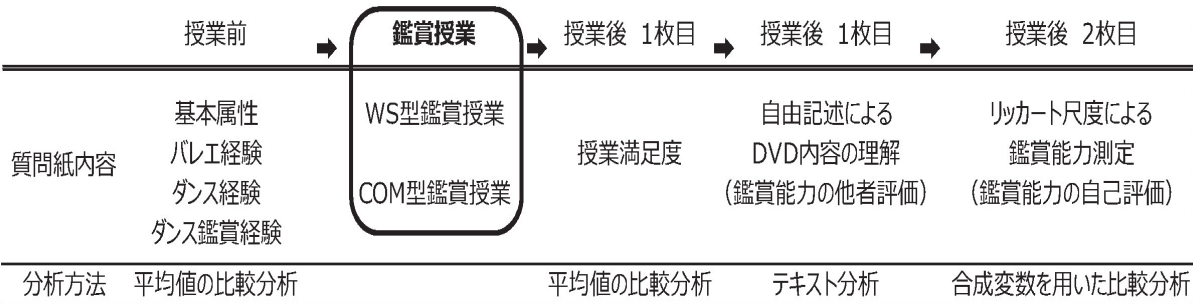


図2 研究枠組と質問紙内容

3. 分析方法

鑑賞内容についての自由記述は内容分析を行い、記述量の分析など一部の統計的処理にはカイ二乗検定を用いた。また、鑑賞能力の自己評価については平均値の差の検定を行った。基本属性、ダンス経験、授業評価の差について、解析には統計ソフトIBM SPSS Statistics 20, AMOS 20を使用し、有意水準を5%とした。内容分析については、質的研究・定性調査を目的とするNVivo 10^{注5)} および日本語の分析に優れた多くの研究で用いられているKH-coder^{注6)}を使用した。

4. 調査項目

まず初めに基本的属性（年齢・性別・学部）、バレエ経験（経験の有無・経験年数）、バレエ以外のダンス経験（経験の有無・具体的なダンスジャンル）、およびダンス鑑賞経験（経験の有無・鑑賞媒体・鑑賞作品）を尋ねた。授業後

には授業の総合的評価として満足度を7段階リッカート尺度を用い質問している。

次に鑑賞能力に関する調査項目である。一般に、能力を測定する方法は自己評価（「○○ができた」）と他者評価（「△△ができたと思う」）に分けることができる。Daigo and Sakuno (2014) は、舞踊評論家へのインタビュー調査から15の鑑賞能力を抽出した。なお、本研究は大学生を対象としており、本研究では上記論文内にて提示された鑑賞能力から「舞踊評論家として活動してゆく上で必要となる能力」である語学力やディベート能力、文章力、コミュニケーション能力、オリジナリティ（筆者訳）を除外した^{注7)}。これにより大学生のバレエ鑑賞能力は、形式化する能力、身体共感力、集中力、説明力、客観力、分析力、情報整理力、情報集約力、対応力、評価能力という10の具体的能力によって構成されていることが分かっている（表2）。

表2 インタビュー調査に基づく舞踊鑑賞能力 (Daigo and Sakuno, 2014) (筆者訳)

鑑賞能力	定 義
形式化する力	内面にある印象を固定化し、会話力・文章化力・表現力を用いて形式化することができる
身体共感力	舞台上の身体（技術やリズム）を自己に投影することができる
集中力	鑑賞に対し、好感・身近さを感じ興味が集中している
説明力	鑑賞から抱く主観に対しなぜそう思ったのか説明することができる
客観力	客観的に作品や舞台上の出来事を正確に捉えることができる
分析力	細部と全体に対し分析的な視点を持つことができる
情報整理力	情報を自分の中に取り込むことができる
情報集約力	新たに得た情報を結び付け、知識として扱うことができる
対応力	新しい刺激や情報に対応し自分の中に判断の基準を持つことができる
評価能力	根拠を持って舞踊・作品・製作者・評論に対し評価することができる

上記の鑑賞能力は、鑑賞中や理解の過程で必要となる能力（身体共感力・集中力・対応力・説明力・分析力・情報整理力・情報集約力）、表出化の過程で必要となる能力（客観力・形式化する力）、表出化の結果から読み取ることのできる能力（評価能力）の3つのフェーズにそれぞれに対応した能力としてとらえることが可能である。したがって、本研究では、他者評価としてDVD作品の内容理解を第三者的に把握するための自由記述（図2における授業後1枚目の質問紙）、および参加者自身による鑑賞能力の自己評価（図2における授業後2枚目の質問紙）によって鑑賞能力を把握するための調査票を作成した。

他者評価においては、「作品を見た印象」「内容・ストーリーの説明」「動きの描写」「初見事項について」「作品の全体評価」が分析対象である。これらは、表3に対応する鑑賞能力が発揮される質問として評論家1名、舞踊家1名、鑑賞プログラム担当者1名、筆者の計4名によって協議された結果である。例えば、形式化する力については定義である「見た印象を固定

化し表現する」から、みた印象についての記述内容から正確さ、使用する語の多様性、表出化できている内容量等を分析の対象とした。五つの質問全てに現れると考えた分析力などについては、定義である「細部と全体に視点を向けることができ探索的な視点を持つ」との内容に沿ってダンサーや衣装など細かな注目点と作品全体の印象や物語性の理解など両方の視点を同時に持っているかどうか、解説を行う指導者やスタッフの話だけでなく自身の知識や他者との会話を通して理解をしているかなどを評価の基準としている。自己評価尺度は、Daigo and Sakuno (2014) が行った舞踊評論家へのインタビューデータに立ち返り、どのような具体的な意識や行動が当該能力を有していると考えうるのかについて演繹的に文章を作成した。作成された質問文は、他者評価と同じく評論家や舞踊家を含む4名によって議論された。以上の手順によって10の具体的能力それぞれについて3つの質問文が演繹的に作成され、鑑賞能力の自己評価尺度として30項目が定められた（表4）。

表3 他者評価による鑑賞能力測定の枠組み

鑑賞能力	質 問 文
形式化する力	質問1. 「コッペリア」をみた印象を記述してください。
説明力	質問2. どのような内容・ストーリーであったかを説明してください。
身体共感力	質問3. どのような動きによって構成されていたかを説明してください。
説明力	
対応力	質問4. 初めて見たものや初めて知ったことについて記述してください。
評価能力	質問5. 作品の評価をしてください。その理由もお書きください。
集中力	質問全体を通して分析
客観力	
分析力	
情報整理力	
情報集約力	

表4 自己評価による鑑賞能力測定の枠組み

鑑賞能力	質 問 文
形式化する力	みた印象を言葉（発言や文章）にすることができた
	受け取る相手を意識して言葉（発言や文章）にすることができた
	自分の思いを言葉（発言や文章）で表現することができた
身体共感力	技術の難しさに共感することができた
	踊りのリズムを感じるすることができた
	ダンサーの姿を自分に重ねることができた
集中力	身近なものに感じるすることができた
	時間を忘れてみるすることができた
	没頭してみるすることができた
説明力	作品の背景を読み取るすることができた
	何をやっていたのか的確に表すことができた
	分からない・つまらないと言わずなぜそう思ったのか考えることができた
客観力	ほかの人の意見や発言を参考にすることができた
	作り手の意図と自分の意見の違いを考えることができた
	ほかの人はどのように見ているのか意識することができた
分析力	自分なりの解釈を持つことができた
	作品の細部に目を向けることができた
	作品の全体像をとらえることができた
情報整理力	バレエやDVD作品に関する情報が得られた
	バレエやDVD作品の情報を集めることができた
	得た情報を整理することができた
情報集約力	得た情報を互いに関連づけることができた
	得た情報を活用することができた
	得た情報を理解することができた
対応力	新たに知ったことを持っていた知識と照らし合わせることができた
	今までの経験と比較することができた
	過去の舞踊鑑賞と今回では違う楽しさを見つけることができた
評価能力	バレエの様式や決まり事に照らしてDVD作品を評価することができた
	ダンサーの動きを評価することができた
	振付・作品の構成について評価することができた

5. 調査概要

WS型鑑賞プログラムは、2014年7月9日（水）、COM型授業は2014年10月1日（水）に行われ、全学部・学年において受講可能である保健体育授業「バレエ基礎」及び「バレエ応用」を受講する学生を対象とした。

授業で用いたバレエ作品は「コッペリア」（出典：DVDで楽しむバレエの世界「コッペリア」英国ロイヤル・バレエ団）^{注8)}である。コッペリアを選んだ理由は、ストーリーが単純で身近、現実的であることによる。「白鳥の湖」や「クルミ割り人形」のような非現実的な妖精やお化けなどではなく、コッペリアという人形をめぐる人間の物語である。初心者にも体験することのできる場面が作品の冒頭に存在しており、WS型授業をスムーズに行うことが可能であると考えた。

生徒の視点に大きな影響を与えるのが普段指導にあたっている指導者による作品の解説である。映像の修辭には身近な人ほど影響が大きいとの指摘（金井、2001）もあることから、両グループ間の影響の違いが最小となるよう、解説は作品の内容が理解できると思われる最低限の内容とし、シナリオを事前に用意しておくなど留意した。

授業の流れとして、授業内容の説明や鑑賞プログラムのための補助員を紹介した後、WS型の参加者（学生）はまず授業で鑑賞するバレエ作品のバリエーション（踊ること）を体験した。その後、大型スクリーンを囲んでDVD作品を鑑賞し、調査票の記入が終了した者より退出し、授業は終了した^{注9)}。COM型の授業では実際に踊ることを体験せず、DVDを鑑賞後に参加者同士での会話の時間を設けた。話す内容については、あらかじめ6つのテーマ、すなわち（A）バレエの動きや技術について、（B）舞台環境

について（衣装・照明・音楽など）、（C）ダンサーの表情や表現力について、（D）コッペリアという作品の物語性について、（E）バレエ団やコッペリア、ダンサーについて知っていることについて、そして（F）初めてバレエを見た感想（初めてバレエをみた人でAからEについて話すことが難しい場合）の6つを提示した^{注10)}。さらに、話した内容や聞いた内容をより明確にするため「コミュニケーションメモ」を用意し、誰とどのようなことを話したか記録してもらった。最低4名の参加者と会話する機会を持てるように時間を配分し、話し相手の交代を促した。

IV. 結 果

1. 調査対象者の概要

WS型鑑賞プログラムの参加者は57名であった。回収数は57部であり、基本的属性、授業評価における有効回答は56部であった。男女の割合は男性4名、女性52名であった。鑑賞能力についての有効回答は54部であり、男女の割合は男性3名、女性50名であった。一方のCOM型鑑賞プログラムの参加者は67名であった。回収数は67部であり、基本的属性、鑑賞能力の質問項目における有効回答は66部であった。男女の割合は男性9名、女性57名であった。

各グループのバレエ経験は、表5に示した通りである。グループ間に有意な差は認められず過去のバレエ経験については同質の集団といえる。バレエの鑑賞経験について、「直接舞台をみたことがある」「テレビ・インターネット等でみたことがある」を合わせるとWS型、COM型共に84%前後の参加者は鑑賞経験があるとい

表5 回答者のバレエ経験と鑑賞経験

	バレエ経験			バレエ鑑賞経験			
	過去にある	現在継続中	ない	直接舞台をみた	TVやインターネット等	ない	欠損
WS型	29 (51.8)	7 (12.5)	20 (35.7)	38 (67.8)	9 (16.1)	9 (16.1)	2 (3.0)
COM型	37 (56.1)	7 (10.6)	22 (33.3)	41 (62.1)	15 (22.7)	8 (12.1)	0

単位：人（%）

授業評価は、「本日のバレエ授業は楽しかったか」という質問に対し、WS型が5 %水準で有意に高い結果となった(表6).

	n	平均值	有意確率
WS型	56	6.25	0.27 *
COM型	66	5.86	

*p<.05

2. 他者評価による鑑賞能力の測定および鑑賞プログラム別の比較

鑑賞後の質問紙によって得られた自由記述の内容から、各グループの参加者が鑑賞後に保有する鑑賞能力の特徴について分析を行った。自由記述の記述量を文字数で統計処理したところ、5つの質問すべてにおいてCOM型受講者の方がWS型受講者よりも有意に記述量が多いこと

(1) 鑑賞した印象を形式化する際にみられる鑑賞能力

質問1「バレエ作品をみた印象をお書きください。」は、印象の固定化を促し、注目した箇所や、記憶に残っている内容が表れるよう「形式化する力」を想定し作成された。図3は、KH-coderによる形態素分析の後、抽出語による共起ネットワーク図を描画した^{注11)}ものであり、共起の程度を示すジャカード係数^{注12)}は0.2以上が選択された。図2では、ジャカード係数が0.4以上の抽出語を描画しており、WS型参加者の抽出語間に複雑な共起が存在していないことが分かる。ジャカード係数の値を上げることで、強い共起のみが可視化される形となり発言内容の中心（多くの人が語った内容）を読み取ることができる。

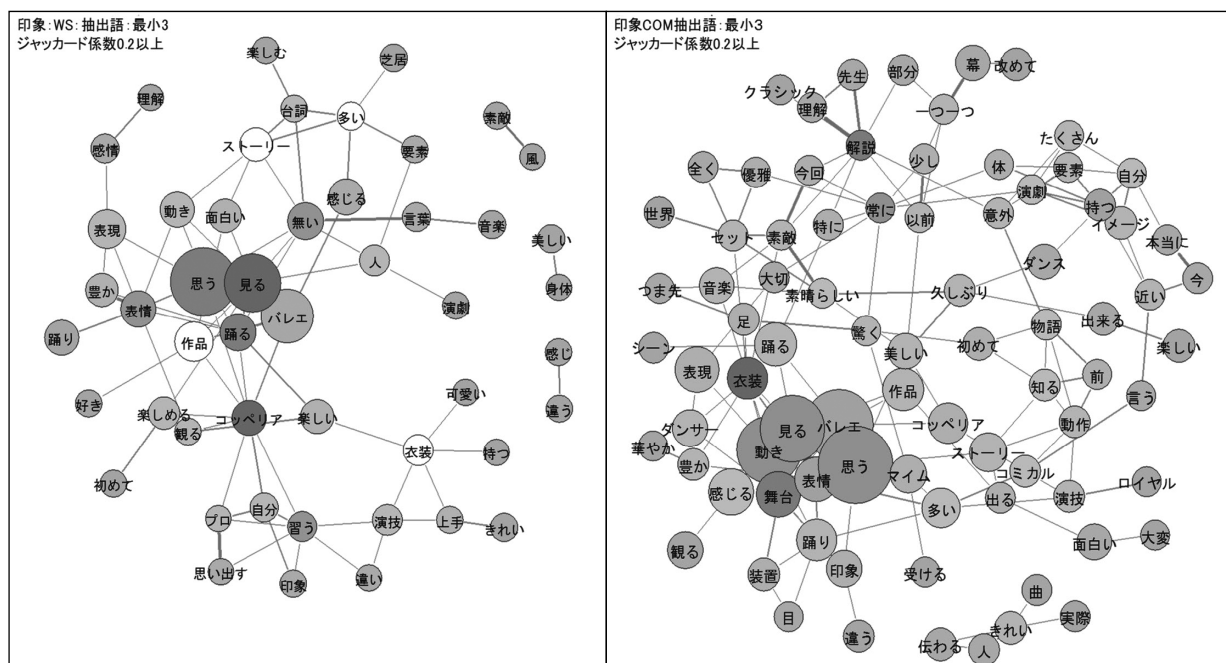


図3 質問1におけるWS型(左)およびCOM型(右)の共起ネットワーク図
(ジャックカード係数0.2以上)

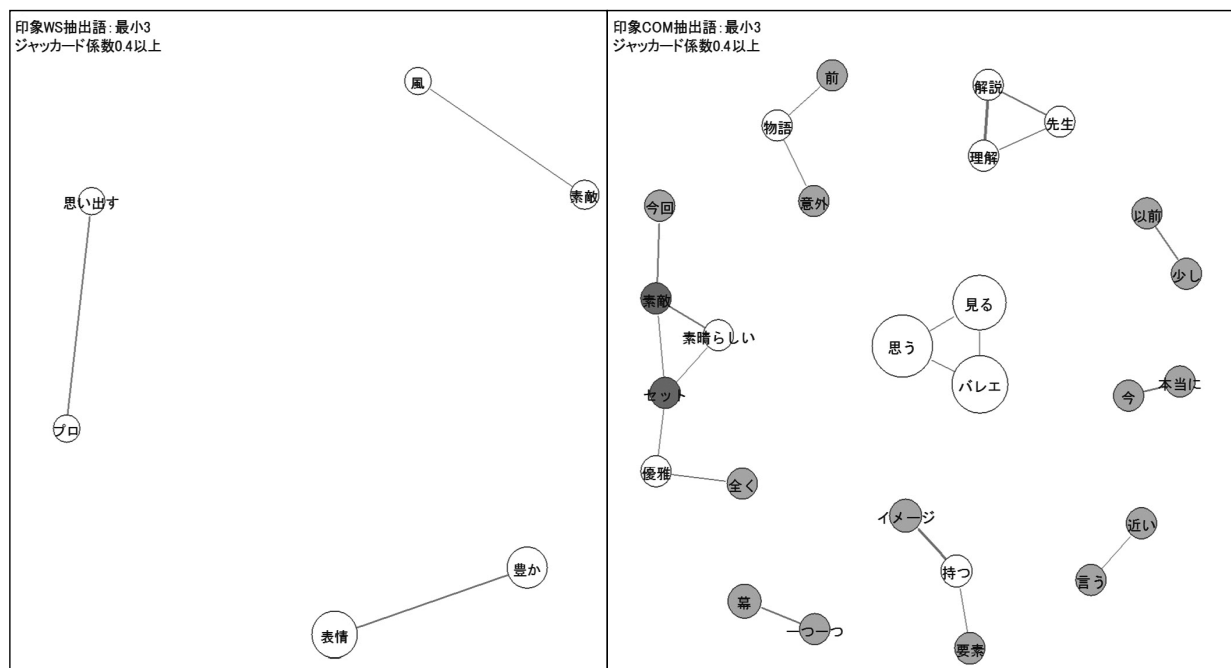


図4 質問1におけるWS型（左）およびCOM型（右）の共起ネットワーク図
（ジャッカード係数0.4以上）

表7は、具体的な抽出語対（ペアとなる語）を書きだしたものである。抽出語対をみていくと鑑賞能力に結び付く記述が存在していることがわかる。例えば、最も共起の程度が重い「解説—理解」「イメージ—持つ」や、「解説」「理解」「先生」の組み合わせによる抽出語対は、知り得た情報を関連づけ知識とする能力であり、本研究における「情報整理力」「情報集約力」と捉えることができる。「以前・前・今・今回」といった語が含まれる抽出語対は、これまでの回答者のもつ経験との対比が記述されており、鑑賞能力における「対応力」に相当する。その他にも、「評価能力」や「形式化する力」についても自由記述のなかに表れていることがわかる。「身体共感力」に相当すると思われる記述にはCOM型に具体的な身体部位が使われている点など、それぞれの鑑賞プログラムの特徴が表れている。

表7 質問1にあらわれた抽出語対の比較

抽出語対		抽出語対		鑑賞能力
Word 1	Word 2	Word 1	Word 2	
		解説	理解	情報集約力 ¹⁾
		イメージ	持つ	
		先生	解説	
		先生	理解	
思い出す	プロ	物語	意外	対応力 ¹⁾
		物語	前	
		以前	少し	
		今	本当に	
		今回	素敵	評価能力 ¹⁾
豊か	表情	素敵	素晴らしい	
素敵	風	素敵	セット	
		優雅	セット	
		思う	見る(みる)	形式化する力 ¹⁾
		思う	パレエ	
		言う	近い	身体共感力 ²⁾
自分	習う	足	つま先	
自分	プロ	足	驚く	
きれい	上手	動作	前	
身体	美しい			

1) Jaccard係数 0.4以上

2) Jaccard係数 0.3以上 を表記

(2) バレエ作品の内容描写や説明過程にみられる鑑賞能力

質問2「どのような内容・ストーリーであったか説明してください。」は、どのような動きや背景を持つバレエ作品であったかを正しく描写し、論理的に伝えることができるための「説明力」を想定した設問である。結果として作品の細部と全体への理解度（正確さ・身近さ）を確認でき、「集中力」「分析力」についても確認することができた。NVivoを用いてコーディングを行ったところ、表8に示した7つの視点に集約することができた。それぞれについて言及されているか否かを数値化し、カイ2乗検定による比較を行ったところ「2：人形（コッペリア）について名称と説明が書かれている」と

「5：作品の冒頭部分について説明されている」のふたつについてグループ間に有意な差が認められ、どちらもCOM型においてWS型よりも記述した者が多い傾向にあることが明らかとなった。作品の冒頭部分はWS型鑑賞プログラムの中で実際に踊った場面でもある。それにもかかわらずWS型よりもCOM型の学生の多くがその内容に言及しバレエ作品を説明していること、その記述内容が正確であることは興味深い結果であった。作品の中間部分について有意な差は認められないもののWS型では約半数が記述していないのに対し、COM型では7割弱の学生が説明を記載しており、COM型を受講した学生の方が全体を通して理解し文章化できていることが明らかとなった（表8）。

表8 内容・ストーリーの説明力の比較

回答の内容	授業形態	なし (%)	あり (%)	Pearsonの カイ2乗
1：主人公（スワニルダとフランツ）の名称と説明が書かれている	WS型	32 (56.1)	25 (43.9)	.207
	COM型	30 (44.8)	37 (55.2)	
2：人形（コッペリア）について名称と説明が書かれている	WS型	38 (66.7)	19 (33.3)	.001**
	COM型	25 (37.3)	42 (62.7)	
3：人形師（コッペリウス）について名称と説明が書かれている	WS型	45 (79.0)	12 (21.0)	.196
	COM型	46 (68.7)	21 (31.3)	
4：恋愛のお話であることに触れている	WS型	7 (12.3)	50 (87.7)	.849
	COM型	9 (13.4)	58 (86.6)	
5：作品の冒頭部分について説明されている	WS型	25 (43.9)	32 (56.1)	.018*
	COM型	16 (23.9)	51 (76.1)	
6：作品の中間部分について説明されている	WS型	28 (49.1)	29 (50.9)	.065
	COM型	22 (32.8)	45 (67.2)	
7：作品の結末について説明されている	WS型	22 (38.6)	35 (61.4)	.622
	COM型	23 (34.3)	44 (65.7)	

*p<.05. **p<.01. ***p<.001

(3) バレエの動きを説明する際にみられる鑑賞能力

質問3「どのような動きによって構成されていたか説明してください。」は実際に踊った経験（WS型）が表出化にどのような影響を与えるかについて、「身体共感力」と「説明力」の表出を想定した質問項目である。表現については、実際に踊ったWS型の学生が記述する傾向にあった。動きについての描写は、身体運動やテクニクに関する抽出語によって記述されるが、これらの語の出現回数や共起に大きな差はない。記述を詳細に確認すると、COM型では「顔」と記載しているのと同じ内容を「表情」と記述しており身体部位の「顔」ではなく表現の一部と捉えていることなどが特徴であった。一方、COM型の受講者は、身体部位を「手」や「つま先」など、細かく記載している傾向にある（表9）。

(4) 初見事項を説明し言語化する過程にみられる鑑賞能力

質問4「初めてみたもの、初めて知ったことについて記述してください。」は、初めてみるものや初めて知ったことに対し過去の経験や知識を照らし合わせることができる「対応力」を想定した設問である。バレエ作品を（早送りの箇所があったものの）最初から最後までみたのは初めてであったという参加者も多く、具体的に初めてみたもの、知ったことは「麦の穂のシーン」と「黒人ダンサー」、「民族舞踊」についてであった。「麦の穂のシーン」はこの作品の中でマイムを中心に語られるシーンであり、作品に用いられている逸話やマイムの理解がない場合、特に気にもとめず過ぎてしまう場面である。「黒人ダンサー」や「民族舞踊」についての回答は参加者がもともと持っていたイメージ（主役ダンサー、もしくはバレエダンサー全体で白

表9 動きの説明に用いられた抽出語の比較

カテゴリー	WS型		COM型	
	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
舞踊ジャンル	バレエ	16	バレエ	25
	民族	6	舞踊	10
	舞踊	6	民族	13
	ポーランド	4	キャラクター	6
			パントマイム	5
表現			クラシック	5
	人形	16	人形	20
	表現	9	表現	14
	縁起	8	演技	4
	キャラクター	3	コミカル	3
	表情	3		
動きの説明	コミカル	2		
	ジャンプ	2	ジェスチャー	3
	パ	2	ステップ	3
	回る／まわる	2	ターン	3
	繰り返す	2	歩く	2
	伸ばす	2	ジャンプ	2
	跳ねる	2	パ	2
	動く	2	回る	2
	飛ぶ	2	投げる	2
身体部位	足	4	手	5
	身体	2	顔	4
			足	4
			つま先	2

人ダンサーが多いイメージ) やバレエのバレエらしい動きと違っていたことで自覚し記述されたものである。

ジャカード係数が0.4以上(本研究においては強い共起を表す)の抽出語をみるとどちらのグループにも「使う」を含む抽出語対が現れている。WS型では「使うー体(身体)」の対であり、COM型では「使うー伝わる」「使うー豊か」「豊かー伝わる」において共起が認められる。「使う」対象を自由記述の回答に戻って確認するとWS型では「体(身体)」「足と体」であり、体(身体)の使い方に関する記述が多い。バレエは、滑らかでしなやかな動きとダイナミックなテクニックの連続をイメージしていたが、カクカクとした動き(回答原文まま)や猫背のキャラクター、踊らないキャラクターなど、これまでのイメージと異なっていたという記述が目立つ。COM型の共起図では「使う」と「ジェスチャー」「話」「豊かー表情」が結びついており、さらに「伝わる」や「分かる」と

の関連があることから、みたものを理解するため「ジェスチャー」や「表情」が重要であったという記述が多数存在している。

(5) バレエ作品の評価をする中でみられる鑑賞能力

質問5「作品の評価をしてください。その理由もお書きください。」は主に「評価能力」についての設問である。結果として、評価の説明をする中で「客観力」や「分析力」についての記述も確認された。評価に結び付く形容動詞と形容詞のなかで、複数名に回答が見られた抽出語を整理したものが表10である。こうした抽出語はいくつかの理由を述べた後に最終的な評価として表出している語である。抽出語の数と多様性は全体を通してCOM型の方が多く、特に出現回数1(1人しか使用しなかった語)まで含めるとその差はより顕著となった。しかし、WS型、COM型どちらも好意的な評価とともに、批判的な評価を示唆する語を含んでおり、鑑賞

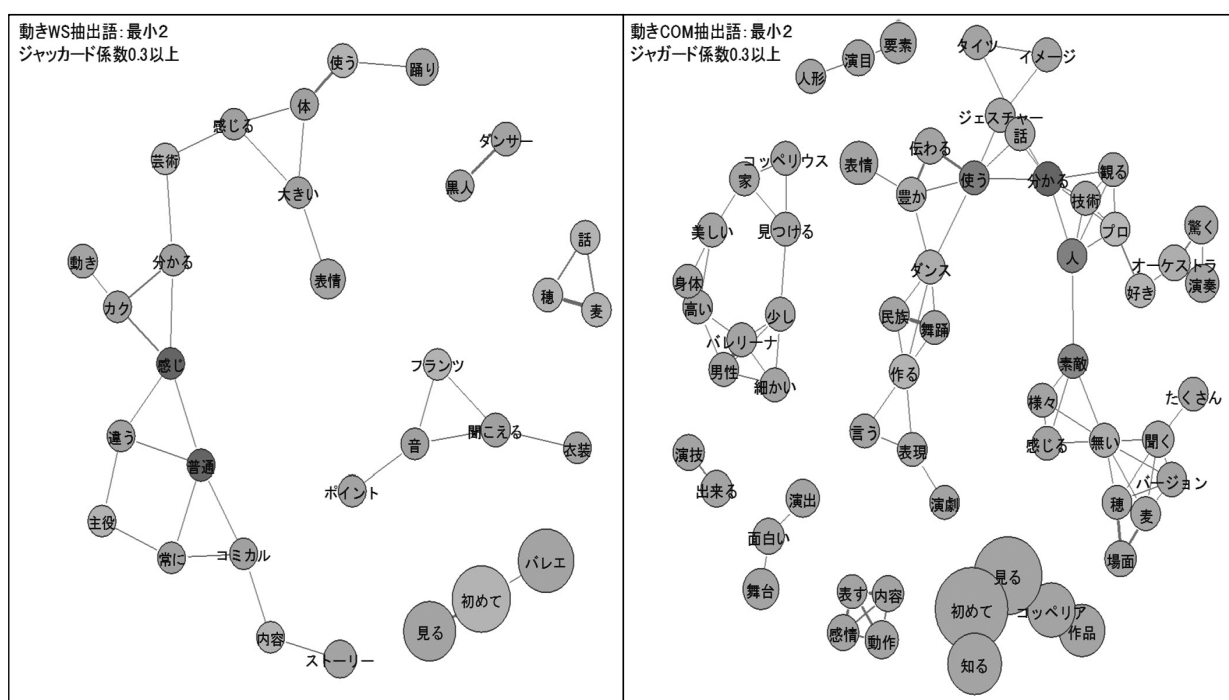


図5 質問4におけるWS型(左)およびCOM型(右)の共起ネットワーク図

表10 質問5における評価に関わる抽出語

WS形容動詞		WS形容詞		COM形容動詞		COM形容詞	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
コミカル	4	面白い	14	豊か	9	面白い	15
好き	3	楽しい	9	好き	7	素晴らしい	10
豊か	3	無い	7	コミカル	4	多い	9
シンプル	2	良い	4	きれい	3	美しい	9
チャーミング	2	可愛い	3	豪華	3	無い	8
気軽	2	興味深い	3	しなやか	2	良い	8
素敵	2	素晴らしい	2	ハッピー	2	楽しい	6
		長い	2	華やか	2	明るい	3
		美しい	2	上手	2	可愛い	2
		いい	5	新鮮	2	細かい	2
		よい	6	大好き	2	すごい	9
		すごい	7			ない	4
		おもしろい	6			よい	4
		やすい	3			いい	3
		かわいい	2			おもしろい	3
						かわいらしい	2

プログラムの違いに関わらず批判的考察と評価の視点を持ち合わせていることがわかる。

3. 自己評価による鑑賞能力の測定および鑑賞プログラム別の比較

鑑賞能力の自己評価については、それぞれ演繹的に設定された3つの質問文で回答を得たため、分析には合成変数を用いたうえで鑑賞プログラム別に平均値の比較を行った。

まず初めに、鑑賞能力測定尺度の信頼性について検討する。ここでは、鑑賞能力の各要素における内的一貫性について検討した。内的整合性の目安となるクロンバックの α 係数は一般に0.7から0.8以上であれば十分に妥当であると解釈されており（小塩，2004），身体共感力において0.648とやや低かったほかは、表12に示した結果からおおよそ使用可能であると判断した。合成変数によって作成された鑑賞能力の各要素間の相関（Pearsonの相関係数）は全ての項目間において有意であった（ $p<.001$ ）。このこと

は、鑑賞能力の各要素が相互依存的事象であることを表している。

授業形態間において有意差がみられたのは「形式化する力」「客観力」「情報集約力」であった。得た情報を関連づけ理解し、知識とし（情

表11 自己評価による鑑賞能力測定尺度（内的整合性）

鑑賞能力	Cronbachの α 係数	項目数
形式化する力	.837	3
身体共感力	.648	3
集中力	.839	3
説明力	.670	3
客観力	.666	3
分析力	.734	3
情報整理力	.671	3
情報集約力	.864	3
対応力	.659	3
評価能力	.739	3

表12 自己評価における鑑賞能力の平均の比較

	WS型		COM型		t 値
	mean	SD	mean	SD	
形式化する力	13.48	3.805	15.76	3.134	-3.614***
身体共感力	15.28	3.428	15.06	3.079	.368
集中力	16.67	3.336	16.61	3.433	.088
説明力	14.19	3.163	14.76	3.353	-.963
客観力	12.11	3.994	15.66	2.931	-5.628***
分析力	15.93	3.555	15.94	3.064	-.024
情報整理力	15.39	3.105	15.52	2.787	-.249
情報集約力	14.72	3.515	16.46	3.072	-2.905**
対応力	15.43	3.317	16.09	3.137	-1.127
評価能力	13.67	3.777	14.93	3.552	-1.884

*p<.05. **p<.01. ***p<.001

報集約力)、他の人の意見や感想を取り入れ(客観力)、表出化するために言語と結びつける(形式化する力)といった段階において表出化高位のCOM型授業が高い値を示している(表12)。

V. 考察

鑑賞プログラムに参加した学生のバレエ経験は、どちらのグループも約半数は過去にバレエ経験があり、1割程度が現在も行っていると回答した。両グループともに3割以上はこれまでバレエを踊ったことのない未経験者であったことは、大学卒業後の生涯学習としてのスポーツ鑑賞行動やスポーツ文化の消費を見据え大学生を対象とした本研究において重要な対象者であったと考える。彼らへのアプローチを模索することで学校体育では扱わない種目やニュースポーツなどをコンテンツとする経営体にとって今後有益な示唆ができる。

総合的な授業評価についてWS型の方が有意に高い得点であったことについて、鑑賞プログラムが一過性のイベントや体験会のような機会として捉えられており、実際に体を動かすことで「楽しい」という評価につながっていることが明らかとなった。実際のスポーツやアートのイベントもこうした経験知に基づき、体験機会

を積極的に設定しているものと思われる。しかし、観客のスポーツ観戦の質的深化に向けた鑑賞プログラムの成果を、「楽しかったか否か」で結論付けることはあまりにも短絡的であり、まずは文化教育(田中, 2012)としてのスポーツ鑑賞の機会が「望ましい」形で提供され、それが同時に「楽しい」経験ともなることを目指すべきであろう。

鑑賞後の表出化について、質問に対する記述量や使用する語の多様性はCOM型鑑賞プログラムの受講者の方が多く(高く)、自由記述の内容からもスポーツ鑑賞能力として読み取ることのできる要素が多く認められている。みた内容を振り返り、自身の印象を固定化するための記述にはCOM型の受講生から様々な鑑賞能力の要素が表出しており、言語化する過程で「情報集約力」「対応力」「評価能力」「身体共感力」が発揮されている様子が捉えられたと言える。鑑賞内容を描写する記述では、主人公についての言及にグループ間の差はなかったものの、作品の冒頭部分についての記述率はCOM型が有意に高く、作品全体(冒頭・中間・結末)を描写できていることが明らかとなった。作品全体と細部の両者に目を向けることができるという点も鑑賞能力の一要素である。動きの説明ではCOM型の受講生から、他のダンスジャンルや比喻表現を用いて説明する内容が多くみられた。

WS型を受講した学生から新たな情報や刺激を問う質問において、既存のバレエイメージとの違いを述べる文脈が多く抽出され、その一方でCOM型では豊かな表情やジェスチャーをストーリーの理解や作品の理解に使っていることも鑑賞プログラムの効果と特徴として明らかとなった。評価に用いる語の種類や多様性についてはCOM型受講生の回答により多様性が認められ、さまざまな言葉を使って評価している傾向が読み取れる。

自己評価による鑑賞能力のうち、表出化に直接関わる能力（形式化する力・客観力・情報集約力）がCOM型で有意に高いことが明らかになった。情報整理力では有意な差が認められなかったが、情報集約力が有意に向上したことについては、WS型よりもCOM型の方が「情報を受け取ったか、情報を得たいと意欲的であったかよりむしろ得た情報を理解し、知識として自らのものとしているか」について違いを生むことができる」と指摘できる。形式化する力（つまり表出化）や客観力は評価能力を支えるスポーツ鑑賞能力の要素である。つまり、最も高度な能力であるとされる評価能力を養うためには表出化させ連結化させるフェーズが特に重要であることからCOM型の有効性が示されたといえよう。そして、形式化する力や客観力は他の能力に比べ経営体がその伸長を手助けすることのできる能力のひとつである。

VI. 結論

本研究における目的は、バレエ鑑賞プログラムを通して異なるプログラムの性質とその効果の比較を行い、スポーツ鑑賞行動の提案に向けてモデルの構造化を試みることであった。前述の考察を踏まえ、WS型の鑑賞プログラムには観客の総合的な満足を得る効果があり、COM型の鑑賞プログラムにはプログラムで使用するバレエ作品の広く深い理解、プログラム実施後の形式化や表出化につながる能力が高く測定されることが明らかとなった。第二の目的であるスポーツ鑑賞行動の提案に向けた考察として、鑑賞能力を「スポーツをみている主体（観客）」と「スポーツ（鑑賞対象）」の間に位置づけると、図6のようにその構造を把握することが可能となる。具体的には、知覚や認知としての観戦行為（知覚・認知フェーズ）において集中力と身体共感力が必要であり、観客自身が意味づけを行う過程（内面化・意味付与フェーズ）においては、情報整理力、説明力、情報集約力、分析力、対応力が求められる。表出化や他者との共有と連結、鑑賞対象への評価（表出化・評価フェーズ）においては、形式化する力と客観力がスポーツ観戦能力として存在する^{注13)}。

また、本研究において実際に行われた2つの鑑賞プログラムは、スポーツ鑑賞行動を特徴づけると考えられる表出化の程度を統制（高位と

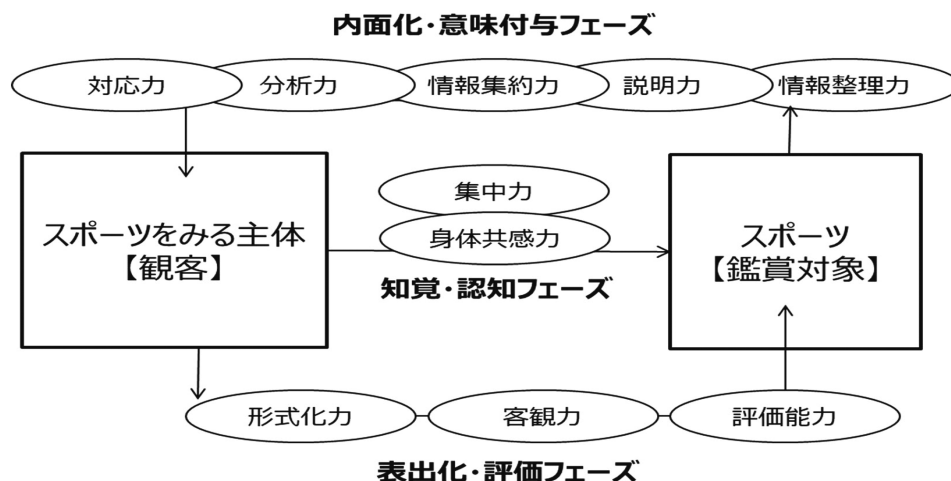


図6 スポーツ鑑賞行動の構造とスポーツ鑑賞能力

低位)したものであったが、鑑賞能力は全体を通して表出化低位のWS型よりも表出化高位のCOM型において高かった。図6における表出化・評価フェーズを経験することが、スポーツ鑑賞能力の伸長において有意味であることが、少なくともバレエ鑑賞において実証されたといえる。しかし、本研究の対象はバレエを題材とした鑑賞プログラムであったが、この結果をスポーツ鑑賞プログラムにまで発展させるにはまだいくつかの課題が残されている。その最たるものが勝敗に関する視点であり、本研究の受講生にはスポーツにおいて重要な構成要素となる勝敗に向かって湧き上がる心的側面が抜け落ちている。今後、本研究の結果をスポーツへ展開させてゆくためには、「勝敗」をいかに扱うべきか十分に検討する必要があるだろう。

本研究の認識基盤となった鑑賞能力は、そもそも舞踊評論家から抽出されたものであり表出化(特に描写や言語化)に関わる能力(についての発言)をもとにしていることが研究結果に影響を及ぼしている可能性がある。本研究の結果において、鑑賞能力の中でも「形式化する力」の内的整合性が最も高く、尺度としての信頼性が保証されている。つまり、図6に示した鑑賞能力のなかでも「表出化・評価フェーズ」を明晰に示している傾向があり、今後スポーツ鑑賞行動全体をとらえ鑑賞能力を研究対象とするためには「知覚・認知フェーズ」「内面化・意味付与フェーズ」についてさらに注意深く分析していく必要がある。

スポーツ鑑賞プログラムとして今後展開していく際は、上記の勝敗やバレエとの違いに注目するだけでなく、プログラムの組み合わせについても検討していく必要がある。つまり、WS型やCOM型、これまでに醍醐ら(2016)によって行われている一方的解説型などは必ずしも独立して行うべき内容ではない。それぞれの良い効果を認識し、周辺環境や時間的制限に合わせた鑑賞プログラムが行われることで、研究的視点を内包したケーススタディが生まれることとなるであろう。さらにこれまではスポーツ種目を実際に体験するなどWS型プログラムの実施

が多かったように思われるが、本研究ではCOM型のような表出化の機会をマネジメント施策として取り入れることの効果が確認されている。いくつかのスポーツチームで行われている子どもたちによる観戦記の募集や、アマチュアスポーツライターに向けたスポーツ評論の機会などはCOM型のスポーツ鑑賞プログラムの表出化の機会に類似している。今後こうした活動も積極的に企画されていくことで、スポーツ文化を見据えたスポーツ鑑賞の機会になることであろう。

注

注1) スポーツ経営体とは、スポーツに関する事業を企画・運営・提供する(多くは複数人によって構成される)組織を指すことが一般的であるが、本研究において想定するのは「スポーツをみる」ことに関わるスポーツ製品を作り出す人や組織である。経営体がスポーツ事業提供者(組織)に限られるわけではなく、時には観客さえも経営主体に成りうる可能性をはらんだ表現である。

注2) 大学体育が必ずしも全て主体的で自発的であるわけではないが、本研究において対象とした授業は全学部全学年を対象とした授業(オープン科目)であり、必修として受講する学生は皆無である。

注3) 美術分野において鑑賞プログラム(鑑賞授業・鑑賞教室)を対象とした研究がさかんになされている。その内容は①教授方略(教育方法)そのものや、その学習効果をどう解明するかについての研究(杉林, 2003: 奥本, 2006: 宮下, 2010: 日吉・山田, 2012)、②より効果的に指導するための研修や環境についての研究(種倉, 1996: 岡山・高橋, 2009: 若宮, 2009)、③鑑賞プログラムの意義やその他の活動との位置づけについての研究(新井, 1993: 向坂・平野, 1995)に分類することができる。

注4) まったく参加者が鑑賞プログラム実施中に表出化する機会を持たない「(一方的)解説型」については筆者の過去の研究(醍醐, 2015)が相当する。

注5) NVivo (エヌヴィボ) は, 文章, 自由回答アンケート, インタビュー, フォーカスグループ・ディスカッション, 録音データ, ビデオなどの質的データを, より迅速で容易に整理・分析・探求するソフトウェアである。本研究においてはインタビューデータを文章化し, オープンコーディング, コード化を行った。

注6) KH-Coderは, テキスト型(文章型)データを統計的に分析するためのフリーソフトウェアである。アンケートの自由記述・インタビュー記録・新聞記事など, さまざまな社会調査データを分析するために制作されたもので, 「計量テキスト分析」または「テキストマイニング」と呼ばれる方法に対応したソフトウェアである。

注7) 舞踊評論家へのインタビュー調査から, 彼らの鑑賞能力を明らかにした醍醐(2015)は, 社会学におけるプロフェッション研究(専門的職業集団の研究)の派生研究のひとつであるプロフェSSIONナル化プロセス研究(西脇, 2013)に依拠し, 一般の観客の中でも鑑賞と表出化の機会が豊富である人の集団として評論家を捉え研究をスタートしている。本研究の目指すスポーツ鑑賞行動においても, スポーツをみたその実態を表出化する人材やその能力はスポーツ経験者・実施者に限らず広く捉えてゆこうとするものであり, こうした批判的考察を社会に残してゆくことができるのは「評論家」という限られた職業人だけでない。こうした理由から, 職業技能と考えられる能力は, 本研究における鑑賞能力には採用しないこととした。

注8) 「コッペリア」(出典: DVDで楽しむバレエの世界「コッペリア」英国ロイヤル・バレエ団)である。コッペリアを選んだ理由は, ストーリーが単純で身近, 現実的で

あることによる。白鳥の湖やクルミ割り人形のような非現実的な妖精やお化けなどではなく, コッペリアという人形をめぐる人間の物語である。初心者にも体験することの出来る場面が作品の冒頭に存在しており, WS型の体験がスムーズに行うことが出来る考えた。COM型のおしゃべりの時間も含め, 言語化する機会を多く設定した授業であるためマイムや表現によって動作の意味を解釈しやすいことも教材として採用した理由である。

注9) WS型の鑑賞プログラムは吉田(2011)における表現・制作の組み合わせ型鑑賞授業を基に提案されたものである。吉田は制作(表現)活動と鑑賞を時系列上どう位置付けるかについていくつかのパターンを提示し, 制作の終了後に鑑賞することは, 「表現(制作)体験に基づいて発展的にその技法・材料・様式等が人類の文化のどこに繋がっているのか, 位置づいているのかなどを理解させる」であると述べた。スポーツ文化創造を見据えたスポーツをみることを研究対象とする本研究において, 表現にあたる体験を先に行うことは適切であると判断した。

注10) これは, スムーズに会話が始められるようにするための配慮であり厳密に提示された内容に限って話す必要はないとの説明も添えた。これまで筆者は数年にわたりこのような鑑賞プログラムを行ってきており, そのなかで受講生から「会話のトピックをいくつか提示されていることで会話がスムーズに開始することができる」, 「他の人に聞いてみたいことが出てくる」といった意見があり, こうした工夫を行っている。

注11) 形態素解析とは文章を, 意味を持つ最小単位である形態素に分割し, 品詞や活用, 見出し語などを判別・付与する言語処理における最も基本的な処理である。KH-coderにおける「共起ネットワーク」のコマンドを用いれば, 出現パターンの似通った語, すなわち共起の程度が強い語を線で

結んだネットワークを描くことができる。分析の手順は最初ごく一部の強い共起関係だけを線として描画するとよいとされ、その結果をみて描画する共起関係を増やしていく手順をとるとスムーズに探索を進めることができる(樋口, 2014)。描画には次数中心性(degree centrality 記号:CD (i))を用いた。線が集まる点ほど中心性が高いとする最もシンプルな中心性の計算法である。

注12) 共起尺度(主なものにジャッカード係数・Simpson係数・コサイン距離)の一種。ふたつの抽出語やコードについて、どちらかが出現したうち、同時に出現する回数で計算される。

注13) 本研究が継承する齊藤(2013)によるスポーツをみることの構造についての基礎的認識は、所与の文化価値を内面化し、外的な所産の価値を創り出して外面化し、それが発展・淘汰された新たな所与の文化価値を生成するという文化価値生成プロセスである。本研究においても内面化に至る過程、内面化から外面化へ至る過程、外面化の過程、に当てはまる鑑賞能力が存在しており、齊藤に依拠し3つのフェーズを提示した。

文 献

阿倍勘一(2006)消費されるスポーツ：スポーツ社会学のための計画表(日本篇)。国際経営・文化研究11:1-16。
縣拓充・岡田猛(2010)美術の創作活動に対するイメージが表現・鑑賞への動機づけに及ぼす影響。教育心理学研究58(4):438-451。
新井哲夫(1993)美術教育における鑑賞指導の考え方と方法(1)。群馬大学教育学部紀要芸術・技術・体育生活科学編28巻:197-228。
Daigo,E. and Sakuno,S.(2014)The Growth Process of a Dance Critic. AASM Conference Proceeding:90。
醍醐笑部・木村和彦・作野誠一(2015)バレエDVD鑑賞前後における態度・行動意図の変

容：大学バレエクラスを対象として。スポーツ科学研究12:21-41。

醍醐笑部・木村和彦・作野誠一(2016)ダンス映像のプロダクト構造分析：スポーツ鑑賞授業のための基礎的考察。日本体育・スポーツ経営学研究29:21-32。

海老原修(2004)オリンピックとメディアの発達：スポーツ観戦からスポーツ鑑賞へ。体育の科学54(5):380-384。

深澤弘樹(2010)スポーツ中継の中の「物語」。橋本純一編 スポーツ観戦学：熱狂のステージの構造と意味。世界思想社:162-182。

早川武彦(1998)国際メディア戦略としてのスポーツビジネス：メディア・スポーツ。一橋研究年報:25-34。

早川武彦(1994)「近代スポーツ」から「現代スポーツ」への胎動Ⅱ：その構造モデルの検討作業。一橋大学研究年報:11-18。

林望(2003)「芸術力」の磨き方—鑑賞そして自己表現へ。PHP研究所。

日吉武・山崎浩隆(2012)比較聴取による音楽鑑賞の授業構成：分析的な聴取から鑑賞への発展過程に注目して。九州地区国立大学教育系・文系研究論文集6(1):1-9。

本田由紀(2005)多元化する「能力」と日本社会：ハイパー・メリトクラシー化のなかで。NTT出版

池上惇(2003)文化と固有価値の経済学。岩波文庫

金井明人(2001)映像の修辞に関する認知プロセスモデル。認知科学8(2):139-150。

熊野佳恵・林 徳治・福田隆眞・山田晃子(2005)鑑賞教育における知的理解による試み。教育実践総合センター研究紀要20:171-182。

小柳かおる(2004)日本語教師のための新しい言語習得概。スリーエーネットワーク:21-22。

草深直臣(1983)運動文化論研究の生成と発展。立命館大学人文科学研究所保健・体育研究2:1-77。

松岡宏高(2015)スポーツファンに観戦能力は必要か：スポーツリテラシー。早稲田大学スポーツナレッジ研究会編、創文企画:138-

- 152.
- 松岡宏明(2012)対話型鑑賞と対象作品についての再考. 美術教育296: 26-32.
- 宮下俊也(2010)感性育成のための指導指針: 芸術鑑賞における批評を通して. 奈良教育大学教職大学院研究紀要学校教育実践研究2: 43-52.
- 向坂一彌・平野ゆり(1995)美術教育における鑑賞教育の位置付け (I) 図画工作科における鑑賞活動のあり方 (実践編). 金沢大学教育学部紀要教育科学研究編44: 61-77.
- 中村敏雄(1995)日本のスポーツ環境批判. 大修館書店: 58-63.
- 中村敏雄(1998)スポーツの見方を変える. 平凡社.
- 西脇暢子(2013)組織学会編組織論レビュー I. 白桃書房: 95-140.
- (公財) 日本体育協会(2013)21世紀の国民スポーツ推進方策: スポーツ推進2013 (<http://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data0/about/pdf/21century2013.pdf>)
- 岡田匡史(2010)対話型鑑賞, 鑑賞能力の発達, 鑑賞批評メソッドの研究—読解的鑑賞の準備的論察—. 美術科教育学会誌31: 139-150.
- 岡出美則(1994)モストンの教授スタイル論の検討: 教授スタイル論から教授ストラテジー論への転換を求めて. 愛知教育大紀要19: 1-23
- 岡山万里・高橋敏之(2009)大原美術館における対話による幼児のための絵画鑑賞プログラム. 美術教育学会誌30: 151-162.
- 岡澤祥訓(2002)体育の指導技術論. 高橋健夫ほか編 体育科教育入門, 大修館書店: 109-101.
- 奥本素子(2006)協調的対話式美術鑑賞法: 対話式美術鑑賞法の認知心理学分析を加えた仮説. 美術教育学27: 93-105.
- 小塩真司(2004)SPSSとAMOSによる心理・調査データ解析: 因子分析・共分散分析まで. 東京図書
- 齊藤隆志(1991)観戦行動の分類と要因—スポーツイベント経営の視点から—. 筑波大学体育科学系紀要14: 39-53.
- 齊藤隆志(1999)みるスポーツプロダクトの中核的便益構造と競技会別特徴. 体育・スポーツ経営学研究15(1): 1-16
- 齊藤隆志(2004)有効価値論から見たみるスポーツにおける観戦能力と中核的便益の関係. 日本女子体育大学紀要34: 31-39.
- 齊藤隆志(2013)観戦行動の概念枠組みの検討: 観るスポーツの文化価値創造マネジメントを視野に入れて. 日本女子体育大学紀要43: 117-127.
- 佐藤栄作・片山孝重(2007)スポーツ観戦者研究の類型と今後の課題. 千葉大学経済研究22(2): 203-229.
- 重松大(2009)スポーツを見ることの概念的研究—蓮實のスポーツ批評とウィットゲンシュタインのアスペクト論から—. 体育スポーツ哲学研究31(1): 27-44.
- 杉林英彦(2003)美術館における鑑賞教育の評価方法へのA. ハウゼンの測定法の適用: 三重県立美術館での『ギャラリー・ツアー』における事例調査から. 美術教育学24: 161-171.
- 友添秀則(2009)体育の人間形成論. 大修館書店: 210.
- 種倉紀昭(1996)絵画作品の美的享受と鑑賞指導法について: 美術教育における西洋画鑑賞指導法に関連して. 岩手大学教育学部附属教育実施研究指導センター研究紀要6: 85-94.
- 田中彰夫(2012)芸術と経営に関するイノベーション: 文化教育マネジメントに関する考察. 産業能率大学紀要32(2): 29-44.
- 若宮由美(2009)芸術鑑賞と「調べ学習」の連関: 保育学生の事例から. 埼玉学園大学紀要人間学部篇9: 105-117.
- 吉田貴富(2011)鑑賞指導能力育成のための3 Stepsの発展研究: Step 4 とStep 5 の仮説と実践. 美術教育学32: 453-464.

付記

本稿は, 拙論「スポーツ鑑賞能力とその教授方略—舞踊を手掛かりとして—」(早稲田大学スポーツ科学研究科2015年度博士学位論文)の

一部を書き改めたものである。従って、本文及び図表の一部は上記論文と重複している。ただし、本稿執筆段階での最新の研究背景を盛り込むよう努め、査読者からの指摘に倣い本文の省略及び改変、新たな図表の作成等を随所で行っ

(2017年11月10日受付)
(2018年 4 月21日受理)